

んと決心した。彼は法を變へ手を換へ彼が説の流布を計つた。彼は先づ小冊子が彼が説の理解流布に好都合ならんを信じて、千八百五十一年「精神問題」に就て「なる書」を出した。彼は其序文にかう言つて居る。「舊見の寢臺より全く起き上がらない公衆に對して、予は最初予が「死後の生活」を以て「起きよ」と絶叫した。世人が予が言を聽かないからして、予は再三「起きよ」と叫んだ。予今は此に五度絶叫する。予は予が命のあらん限りは、六度でも七度でも「起きよ」と叫び、只だ何時も同一の「起きよ」と聲があるであらう。」フエヒネルは千八百六十三年「信仰の三動機及び三理由」なる書を出し、千八百六十六年彼が本名を以て「死後の生活」の改版を出した。千八百七十三年「有機體の創造及び進

化に對する意見」が現はれた。何れも彼が哲學の教理を廣めんとの同一の目的より出來たのである。

五 精神物理学及び美學

千八百六十年フエヒネルが創始した有名なる科學の著「精神物理学原理」(Elemente der Psychophysik) が現はれた。彼が説に依れば、凡て精神的現象は物理的現象の他の反面である。精神的運動があれば、之には必ず物理的運動が隨伴する。然れば物理的手段を以て、如何に精神的運動を測定することが出來やうかといふのが、フエヒネルが精神物理学の根本問題である。彼は實に一步を進めて、科學が探求し認識する宇宙の法則なるものは、同時に精神的出來事の法則であると信じて居た

のであつた。物質的なるものを以て、精神的事件を嚴密に測定せんこと、換言せば、精神的運動を測定せん爲め、精神現象に隨伴する有形的運動を測定するのが、精神物理学の問題である。彼は之を以て精神と身體との關係の嚴密科學を立せんとしたのである。其考察の純粹に經驗的なる、其方式の周密にして實驗的なる、しかも數學的に法則の確立を計るなど、全く嚴密科學である。彼が精神物理学は、實に今日の實驗心理学の基礎を作つたのである。然るに驚くべし、彼が此科學的著述の目的は、彼が哲學を證明せんとの企であつて、其根本思想に於ては、ツェンドアフェスタと同一なのである。予は後にフェヒネルが哲學の説明の處に之に關して少しく述べやうと思ふ。

フェヒネルが創始した新科學に對しては、世評が色々で有て、有力な學者の反對も尠なくなかつた。ヘルムホルツの如きも反對者の一人であつた。フェヒネルは後には細かな點に於ては改善を加へたが、其重大なる點に於ては死に至るまで之を固守し、高齡に達しても青年の如き元氣、驚くべき敏捷熟達を以て、群がる敵に對して應戰した。やがて彼が味方も出來た。猶ほ同科學に關する著述「精神物理学に就て」(In Sache der Psychophysik)は千八百七十七年に現はれ、最初の爭論文であつて、ヘルムホルツを筆頭とする幾多の大家の駁論に對する自説の辯護である。千八百八十二年「精神物理学要點の校正」(Revision der Hauptpunkt der Psychophysik)が現はれ、反對者の諸説

をも考量して彼が立脚地を明にし、同時に品切となつた最初の著述の補充に供した。同年又た「精神物理学の問題に關して」の論文を公にした。最後に、彼が生活の終の年、八十七歳の老人、智力毫も衰へず、「心象測定原理及びゲーベル法則に就て」の論文を草した。ヴント此論文を以て「フェヒネルが四十年間従事して居た問題の、最も明瞭なる最も完全なる叙述」であると評して居る。

千八百七十九年ヴント、ライプツィヒに實驗心理学の研究場を初て設立し、フェヒネルが簡單なる實驗法式を基礎として研究を始め、以て斯學を今日發展の域に至らしむるに大に効があつた。當時フェヒネル、ヴントに戯れて言つたこのこと

である。君がそんなに大袈裟に此事をやるなら、君は數年にして精神物理学を完成するだらう。其後やがて實驗心理学の無數の研究者が生じ、他の大學に於ても心理学の實驗場が出来たけれども、フェヒネルが期した精神物理学其物は完成せられない。寧ろ一層活潑なる他の科學が此より生れた。フェヒネルが簡單な仕懸で助手もなく自分獨りで試つたことを、今は無數の實驗場に於て無數の熟練なる専門家が有らゆる輓近の精巧なる方便を以て之を行つて居る。然れども皆がフェヒネルを以て其科學の開祖と仰で居る。フェヒネルは實に其精神物理学を以て、此偉大な今後益々發展すべき實驗心理学の基礎を据へたのである。獨逸有名の哲學者にしてフェヒネルの

傳記をも著せるラスザイツは言つて居る、「コロンブスは東印度に到らんが爲め出發した。彼は此に到らなかつた。彼は彼が求めた以上のもの、即ち新大陸を發見した。後世にして初めて彼が事業の全範圍を測知することが出来る。彼が名譽功績は、米陸が彼が目的の途中にあつたからとて、毫も減じない、耿眼、勇氣、精力が彼が手段であつたからである。フエヒテルに於ても同様である。彼は感覺の測定を求めんが爲めに出發した。彼が得しものは恐くは彼が知らんと思つたものでなかつた。恐くは其以上である。彼は新科學實驗心理學を發見したのである。是れ彼が不朽の事業、只だ後世にしてまた初めて其大きさを測定することが出来るやう。此新領土の探索殖民は、今ま漸く始まつ

たゞけである。」

ヅントもフエヒテルが此學の創始を評價して言ふ、「フエヒテルが事業の永遠に傳はるべきは、彼が最初に精神生活の探究に嚴密なる方法、嚴密なる測定の原理及び實驗的觀察を引入れ、以て嚴格の意呼にて科學的精神學を初めて可能に爲したことである。既に此目的はヘルバルトに髣髴した所であつたけれども、彼は此目的に至るべき道を失した。生理學者もヨハネス・ミユラー以來色々身心の關係に就き研究し、個々の點に於ては既に闡明した所があつたけれども、全般の問題に對して明白なる考を有せず、又た嚴密なる方法の發達を考へなかつた。フエヒテル初めて能く、最初は特別の問題に限られて居

たが容易に廣き範圍に應用さるべき彼が精神物理學測定法を以て精神生活の嚴密なる探究の道を開拓した。フェヒテル自身に於ては、此問題は全然哲學的思想より出たのであつた。而して此哲學的思想の有効證明の爲め、只だ補助として之を見て居つた。從て此學の價值と範圍とを輕視して居た。故に彼にあの哲學的目的がなければ、精神物理學の方法は、心理學のつまらぬ附屬に過ぎぬと思つて居つたらしい。今日吾人は、彼が研究が變り易き哲學上の考より獨立して居つたことや、從て之が爲め心理學が哲學上の爭論より獨立した實驗的科學になつたに、彼が大に貢獻したこと等を以て、彼が功績と認め居る。」

ザント又た精神物理學に關してフェヒテルを稱賛して言て曰ふ「フェヒテルが有した才能の稀なる結合が、彼が他の科學的研究の何れに於ても、彼が精神物理學の研究に於けるが如くに立派に現はれて居るものはなからう。精神物理學原理」の如き著述には、嚴密なる物理數學的方法の熟達、同時に人間の最も幽玄なる問題を沉思する傾向が必要である。彼は之に加ふるに思考の獨創を以てし、依て自己の必要に應じて縱横自在に在來の方便を改め、新奇の慣れざる道を踏むに毫も躊躇する所がない。エーベルの觀察は、其簡單の故を以て驚くべきものであるけれども、實に狭き觀察であつた。他の生理學者の研究及び其結果も個々分離して居り、一定の目的あつてで

なくして、寧ろ偶然の發見である。フエヒナルは此等のつまりらぬ材料よりして新科學を建立したのである。彼自身が觀察の非常に貴重なる所は其實験の根本的秩序的遂行にあるのである。然れども彼が用ゐることの出來た方便が乏しく、又た補助者なくして全く單獨に働かざるを得なかつたが爲め、問題の解明は僅少に止つて居る。然し散漫不完全なる材料よりして明亮精確の方法を創造したことは、今日の科學が示す最大事業の一である。是まで客觀的測定のみに応用せられた計算の原理を、主觀的知覺の範圍に用ゐたといふことが、其目的は姑く措き、非常に學問上興味あることである。」

フエヒナルが美術に熱心な興味を有して居たこと、文學を

好み自ら作詩をも試みたこと等は、前に既に言つた。彼は學者として研究に熱心なるに従ひ、美術に對する嗜好は美的批評の形を取るに至つた。精神物理学の研究も結末に近づき、從て精神現象を科學的に研究する方法をも熟達するに至つたからして、今度は美術が彼が研究の對象となり、一時全く美學に其考究を盡した。而して彼が精神に潜んで居た美術心は、彼が境遇上絶えず培養せられつゝあつた。彼が兄エツアルトは畫家である。彼が甥、姪女、また美術家であつた。其親友の中には、本屋の主人ドクトルヘルテルがあつて、美術を喜び美術を解し、其家は、市及び其他よりの美術家、美術嗜好者の集會所であつた。又た彼が親友のヘルマン・グライセは、其多くの著書中、美學の

著述を以て最も有名である。斯の如く彼が境遇は、彼が美術心の養成、美術の研究には好都合であつた。而して何でも彼が興味を有する事物に法則を發見しやうとの性來の傾向は、今や美術の方面に向つた。

千八百七十六年科に「美學初步」(Vorschule der Aesthetik)が現はれた。凡て認識は實驗的歸納的でないならばならぬといふのが、彼が從來一般の研究の規則であつた。彼が美學も從て實驗的歸納的、一言せば科學的であつて、從來の理想的學派的美學とは全然趣を異にして居る。而して人の倫理的行爲のみならず、一般の活動も、快感の最高程度を得んとする努力に、意義があり價值があるといふのが、彼の說であるからして、彼が美

學も純粹に此快感標準の研究である。從て彼が美學は、其方法及び問題の範圍も狭少である。然れども、彼が在來の理想的哲學的美學より離れて、心理的經驗的方法を美の研究に用ゐた所が、彼が美學の偉大不朽なる價值である。丁度彼が精神物理學が今日の實驗心理學の基礎を爲したやうに、彼が美學は、今か研究眞盛の心理的美學の基礎を爲したのである。彼が美學は、後の研究に幾多の有益なる刺戟を與へ、現今の美學の幾多の胚種を含み、嚴密な實驗科學の手段方便を、極めて複雑なる人間の經驗に引入れ、以て今日の美學の濫觴を爲した所が、彼が偉大なる功績である。フエヒテルは云爲する毎に常に事物の創始者である。

千八百七十七年「闇夜見に對する白晝見」

(Die Tagesansicht

gegenüber der Nachansicht) なる著述が出た。フェヒテルは既に

齡八十を越へたる老人として、彼が是れまで發表した在來の諸種の著述の總合を一書に纏めて、彼が哲學的宗教的の中心の立脚地より之を説明するの必要を感じたのである。宇宙は靈である、精神である、神であるとの彼が見解を白晝見と名づけ、精神は一定一時の存在なる人間動物の個々の主觀的中心に腦髓の附着し、世界は死んだ物質であるとの通常の世界觀を闇夜見と名づけたのである。

六 フェヒテルと降神術

「死後の生活」を一讀した人は、フェヒテルに上述の如く科學

的實驗的傾向が甚だしいにも係らず、彼には之と反對の神秘的傾向があるを認めざるを得ない。一般に彼の如き宗教的感情があり、詩的傾向のある人は、神秘に流れ易い。而して神秘的傾向の人は降神、千里眼、思想傳達、幽靈等の現象を信じ易い。之が妄信を制するのは理性の力である。「死後の生活」及びツェンドアフェスタには、死人の靈が地上に生存することを説き、降神千里眼等の可能をほのめかしてある。故に人往々フェヒテルを以て妄想者と爲した。彼は動もすれば妄想者とならん危険に走つた。然れども彼は元來妄信を制する理性に富み、銳利なる批評的頭腦を有して居た。故に彼は容易く實際に妄想家とはならなかつた。彼は學理的には降神術等の現象の可能を

信じて居たけれども、之が事實と稱するものには、容易に耳を傾けなかつた。

彼の學説が心靈説と類似の點があり、神秘的のものがあるからして、神秘的傾向を有し、或は神秘的の説を唱ふるものが、往々フェヒテルに不可思議の實驗目撃を促した。殊に千八百七十七八度の頃には、屢々降神術の實驗に招がれた。然れども彼は彼が學説の證明には、此の如き魔術幽靈の現象の補助がなくとも、精神物理学を以て立派に成功したと信じて居た。故に彼は斯の如き招待は何時も謝絶した。ところが、フェヒテルが同僚で親友なる天文學者ツエルネル、一日、當時有名であつた亞米利加の降神術者スレイドを携へ來て、實驗を施さした。

物理學者ゼーベル、數學者シユナプテル、其他の同僚も之に臨むことゝなつた。フェヒテルも今度は出席した。フェヒテルは最初より一般にかやうな施術の正規を信せない。彼は之を以て施術者の詐僞手段であるか、或は幽靈が實際に働くのであつても、未來世の病的不健全な状態より起るのであると信じて居た。此時施術者、最初は机の下にて幽靈に字を書かせること、や、机や椅子を動かさせるといふと等を行つた。フェヒテルは信仰に於ても不信仰に於ても、一樣に用心深い人であつた。彼は之を以て全く奇術師の興行と一視した。然るにやがて、ツエルネルが竊に長く信じて居た事柄が起つて、ツエルネルは大に感動し、覺えず涙と流した。是迄疑心に充ちた傍觀者も、其

疑が動搖した。ツエルネルは四のデイモンションを有する幽冥界があるといふ彼が假定を證明せんが爲め、紐の兩端を封じて、中の結を解かしめんと試みた。ところが是が見た所では立派に出來た。ゾーベル及びフェヒネルも此實驗を有効とした。ツエルネルは非常に感動したけれども、フェヒネルはいいやながら事實を承認した。彼は、之が事實でありとすれば、此現象のつまりぬことは、彼が想像して居た幽冥界を大に貶することとなり、また彼が死後の生活の考と全く相反して居る。是れ大に彼が不快とする所であつた。彼は彼が顔前に起つた此實驗の證據を否定することは出來なかつたけれども、是れ常規外の病的出來事であつて、之を以て來世に對して惡き見解

を抱いてはならぬと思つて居た。故に「白晝見」の終に臨て言て曰く、「白晝見は降神術があつても無くても成立する。然し是があるより、無き方が宜い。白晝見は重大な點に於て降神術と一致し、之に支を得ることが出来るけれども、否な或る點までは實際に之に維持を求むるけれども、降神説は其非常規を以て、白晝見のみならず、吾人が從來の認識の全組織に紊亂を來たさしむるものである。」フェヒネルは同様のことを、既に「死後の生活」にも言つて居る。死後の生活第十章、九十七、九十八頁參照。

フェヒネルは彼が生涯を通じて、彼が世界觀の證明を得んと努力して居たのである。降神の目撃の如きは、彼が説を維持するに最も好都合のものである。然るに彼は、彼が説の證明と

なるべきものを容易に信ぜざるのみならず、自ら決定的と見ざるを得なかつた實驗の價值をも、積極的に見ずして、消極的に見たといふことは、彼が研究的態度の客觀的なるに驚かざるを得ない。然れども、彼は此實驗の無効なるを反證することが出来なかつたから、従て他の降神的現象も、詐欺でなく、在り得べきものであるを許さざるを得なかつた。是れ彼が元來全然僻見の無きにも依るが、一は彼自身正直の人であつて、正直の容を爲せる施術者を、普通の詐僞師と見ることが出来なかつたからであらう。後ち施術者スレードが僕の寡婦の發表せし所に依れば、スレードは矢張普通の詐僞師であつて、奇術を行ふたものであつたこのことである。

七 晩年、爲人、習慣

フエヒネルは其晩年猶ほ研究著述には多忙であつたけれども、別にこれぞといふ出来事はなくして、幸福なる生涯を送つた。彼は彼と同氣同質の妻と和合し、親友と交際し、外國の學者と交際して居た。千八百六十年以後は、殆んど毎年休暇中に其妻と保養的旅行を爲し、時には朋友或は親戚が之に伴つた。彼は獨逸の諸方を遊歴した。瑞西、南嶼の山地へも旅行した。千八百七十四年には、羅馬へも行つた。然し彼は旅行に於て、人文より地文を喜んで居た。

彼が眼はあの病氣後、ひと先づ快癒したが、完全でなかつたらしい。晩年内障眼を患ひ、千八百七十三年及び同四年施術を

受け、後また一度施術を受けた。故に殊に晩年には充分眼を大事にせなければならなかつた。

彼が朋友が次第に逝去したことは、彼が傷神の出来事であつた。ヘルマン・グイセは千八百六十六年に死し、ドクトル・ヘルテルは同七十五年に、エーベルは同七十八年に、殊に彼が交際頻繁であつたツェルネルは同八十二年に死んだ。幸に彼が妻は彼より長生した。

齡進むに従ひ、旅行は中止せなければならなかつたが、彼が精神は毫も衰へない。彼は彼が研究特に精神物理学に従事して居た。又た「集合測定學」(Kollektivmasslehre)なる科學的大著述に従事して居た。然し彼が生存中は誰人も之を知らなかつた。

不幸にして之は完成に至らなかつた。

フェヒネルは晩年、その周圍の人々より、色々尊敬愛慕の意を表せられた。千八百八十一年には、彼が八十の誕生を祝され、同八十三年には、金婚式を祝はれ、翌四年十月三日には、教授就職の五十年の祝賀が舉行せられた。彼はまたライプツィヒの名譽市民に推舉せられた。彼が生地に於ては、彼に對する祝賀會が舉行せられて、彼が知らざる牧師は、彼が生れた時刻に寺鐘を鳴らさせたといふ。此等は何れもフェヒネルに一方ならぬ喜びを與へた。

千八百八十七年十一月六日フェヒネル平常の如く勉強したが、夜九時突然卒中に罹つた。やがて覺めたけれども、次第に

弱つて、同月十八日夜半終に永眠した。

二二三

フェヒネルは元來謙遜な靜な學者肌の人物であつて、其生涯は純粹なる學者の生活であつた。質朴で威張らず、外形の立派を好まず、自分の精神を樂んで分に安んずるといふ風であつた。色々の點に於て殆んど小供の如き素朴を有して居た。然れども彼の銳利なる觀察力を以て日進の近代生活の各方面を了解することが出來た。慈愛に富み、真情に深かつた。同時に冷靜なる判斷力を有して居た。想像を逞うすることを好むが、同時に卓絶なる論理的理性、批評的能力を備へて居た。意見の交換、議論を上下するを好んで居たが、また和合的の性質を有して居た。故に凡ての人から尊敬せられ、且つ愛慕されて居た。

彼が居は、ライプツィヒ市の東部に在るブルームンガッセにあつて、極めて質朴な小屋であつた。彼が裝飾なき書齋には、塗の脱げた粗末な四角形の机があつた。書齋と其次の納戸見たやうな小室の壁のところには、數臺の粗末な本棚がある。本棚には本は極めて少ない、只だ草稿が堆積せられてあるばかりである。彼は壯時までは、色々の方面の書籍を驚くべく博く讀んだけれども、長く眼を患つてからは、讀書は殆んど全く禁じてしまつた。只だ僅に他人より讀んで貰つたけれども、實に不満足であつた。故に何んでも自分の古き記憶を辿るか、或は自分自身で發明せなければならなかつた。彼が一番多く用ゐた書は對數表であつて、毎時も彼が机上に横はつて居た。彼が重

に読んで居たものは、彼自身の草稿である。彼は最初は四折の紙に他人が讀むことの出来ぬやうな字體にて其思想を記す。次に之を經めて統一連絡ある文章に綴り、最後に二折の紙に清書する。意に滿たぬことがあれば、猶ほ再三推敲を施した。彼は自ら讀み易からんが爲めに大字を書いた。然し其字體は他人には讀み易からず、活字組は往々頗る閉口したとのことである。彼は書取らすことは出来なかつた。

彼は斯の如く周密な記者であつたが、其科學的著述の中の計算にも非常に念を入れた。彼が著述中の計算は非常に夥多であるけれども、彼は一々必ず數回繰返し其結果の正確を期せなければ承知せなかつた。

彼が時間は殆んど全く沈思と書くことゝに分たれて居た。彼は彼が慰として、彼が夫人と日々散歩をして居たが、散歩中何か考が起ることがあれば、直に歸つて書齋に入り、之を記した。然し他人が彼を訪問しても、決して勉強を妨げられたやうな顔を見せなかつた。彼は未決の問題に關して他人と議論を交ゆることを好んで居た。而して其當座だけでなく、後久しく自分自身で該問題を考へて居たことが屢々あつた。故に彼は談論の際思付かずして、後に思付いたことがあれば、之を書きつけて議論の敵手であつた人に送り、以て長く通信にて意見を闘はしたことがあつた。但し彼が談論の問題は經驗的の問題に限られ、彼が著述にてあの通り勢心に普及を計つた哲學

的宗教的の確信に關しては、殆んど全く談論したことはなかつた。而して彼が従事中の事業に關しては、決して他人に知らせなかつた。一般に人は其完成の後ち初て之を知つたのであつた。其著しき例は、彼が未定稿の「集合測定學」である。此學の計畫は彼が廿年間も懷抱して居り、十年間も此著述に従事して居つたけれども、彼が妻も、朋友同僚も、此著述のことを少しも知らなかつた。彼が死後、彼が未亡人の乞に由り、ザントが彼の書類を整頓した時、該著述を發見して大に驚いた。序に、此著述は、撒遜王立科學會の依囑に依り、ジ・エフリツプスといふ人が之を補修して、出版されて居る。

フエヒネルの哲學

一 緒論

上述彼が生活の一瞥に依つて、讀者は必ずフエヒネルが事實經驗を尙ぶ熱心なる科學者であつて、經驗を超越した言はゞ架空的の哲學には極力反對した學者であつたことを了するであらう。然し讀者は「死後の生活」を読み、フエヒネルが經驗を超越したる來世の生活を詳かに語るを見て、其矛盾の甚だしきを怪まざるを得ないであらう。實にフエヒネルが哲學の精髓を一言以て蔽へば、人間動物ばかりが靈を有するに非ずして、また、植物も地球も、他の遊星も、恒星も、何れも靈を有して

居り、其上に神が宇宙靈として存するといふのである。是れ寧ろ經驗を超越した架空式の哲學見たやうではないか、想像が作り出した一種の詩ではあるまいか。自然萬物に靈ありとの教は、古來東西の思想史上に絶えず現はれた説ではないか。フエヒネルは單に其思想を踏襲布演したに過ぎないではないか。然し吾人は此に思出す、フエヒネルは熱心なる科學研究者であつた、經驗事實を顧慮せない學説は、極力之を排斥したことを知つて居る。吾人は此に依りて必ずしも彼の哲學が純粹なる詩的想像、事實經驗を無視する、單に思想が紬き出した哲學でなからうことを推せざるを得ない。而して此推察は審に彼が説く所を見れば、果して誤たないのであつて、彼が哲學は

決して架空的のものでない、單に詩的創造でもない。吾人は之を了解せんには、彼が哲學上の思想と相連絡して考へ、又た彼が哲學の科學的基礎、少くとも彼が哲學を、科學上の問題と關連して考へねばならぬ。又た萬有皆靈ありとの彼が世界觀は、其大抵に於て古き神話的思想と一致して居り、又た古來屢々世界觀の史上に現はれた説と一致して居る所があるけれども、彼が説は他より承けたものでなくして、全く彼が獨創發明した所である。彼が一時、當時の自然哲學、殊にオーケンの自然哲學に一時感化されしは前に述べた所である。然し彼はやがて其束縛を脱し、却てドクトル・ミーゼスの假名で自然哲學を譏つた。彼が哲學は古來の説にも、又た當時の自然哲學にも、負

ふ所は極めて尠ないのである。

但し細かな點一々の思想に於ては、オーケンの感化全く消失せなかつたかも知れぬ。グントは其フエヒネル講演の六十三四頁にフエヒネルの思想に類似したオーケンの句を集めて居る。

凡そ人の事業は、其人の個人性を以て押印せられてある。換言せば其人の性格の發表である。フエヒネルが哲學を解するには、先づ彼が性質傾向才能、一言せば彼が個人性を考へなければならぬ。先づ第一に彼は最上の科學的才能を有して居た。彼は精確周密を好み、秩序整頓を喜んだ。故に彼は自然界の現象に規則一致あるに非常の興味を有ち、複雑纏綿せる事情に分析を施し、之を簡單なる關係に解かんことを欲した。而して彼は之を爲すに最上の才能を有して居た。彼は數學の造詣深

く、彼が研究分析の補助として自由に之を使まわして居た。彼は實驗方法に於て稀有なる發明力を有し、嚴密を欲する彼が獨持なる努力が之に附隨して居た。彼は他の學者が一定の目的なく行つて居つた實驗を、目的原理よりして之を爲し、以て一層完全なる方法を發展させた。彼が電氣學の研究及び精神物理學のそれは、之が幾多の立派なる證である。

次に彼が特性は、感官的直觀世界(普通の言葉で言へば吾人が五官にて接する世界)に對する彼の熱心なる興味である。彼が未だ眼疾に罹らなかつた以前に有して居た個物の觀察、他人が容易に看過する意外偶然の事物の觀察に於て、彼が感覺の鋭敏であつたのは、一は此熱心なる興味にも依るのであ

る。同時に彼が美的感覺は、彼をして殊に光線色彩の世界を喜ばしめ、從て繪畫等の鑑賞家たらしめた。此特性は彼をして、彼が早時の科學的研究より遠ざかれる、而して一見無規則なるが爲め一般に研究が等閑にされて居た現象に、早くより眼を注がしめた。即ち主觀的色彩の現象である。彼は之に就ては、固より他人が毫も眼に附かなかつたものを發見したのではなかつたが、此現象の混沌の中に秩序規則を引入れたことが、彼が活躍たる觀察の才能と、嚴密なる分析との結合の致す所である。

以上の二特性は科學者に必要であり、又た哲學者にも必要であるが、只だ此文の特性にては、到底フエヒネルの「死後の生

活及びツェンドアフエスタの如き著述は成立することは出來ない。彼は則ち第三の特性を有して居た。此特性は元と彼が性來のものではあるが、彼が境遇運命よりして一層開發されたものである。是れ即ち彼が宗教的感情である。此感情は彼が全存在を満たし、彼が科學的研究に熱中せし時にも、此情は蓋し折り／＼涌出したことがあつたらしい。「死後の生活」は寧ろ彼が科學研究時代の作であるが、第一版の跋文に依れば、其中の思想は餘程以前から有つて居つたらしい。然しあの大病後の此情は益々勢力を逞うした。彼が自然科學者より哲學者となつたのは、實に此宗教心があつたからである。然し彼が自然科學者でなかつたら、彼が哲學は其特色を失うたに相違ない。

此等の科學者としての特性、宗教的思想家としての特性、互に相薫化し、以て哲學者フエヒネルを作つたのであるけれども、哲學者フエヒネルを完全に了解せんとするには、モ一つ重大なる要素がある。此要素は彼が個人性、彼が人物を構成する要素の最も著しきものである。即ち彼が絶對的に僻見のなきこと、及び自説を作るに極めて大膽であり、毫も顧慮する所なきこと、である。此特徴は彼が自然科學の研究にも、彼が宗教的教會的態度にも感化を及ぼし、就中彼が哲學的努力に之が發揮されて居る。彼は如何なる説でも、如何に廣く行はれ一般に認められた説でも、如何に權威と思はれた説でも、決して直に其儘之を信じたことはない。否、説が廣く認められ權威と

思はるれば思はるゝほど、彼は疑の眼を以て之を見た。彼はかう確信して居た。傳來の説、權威の信仰に慣れるといふことは、事物の偏頗なき考察に對する最も危険な、最も多く世に廣がつて居る障礙物である。さればとて、彼は單に奇矯嶄新を喜ぶものでもない。大膽なる假定、在來の信仰に反對する假設必ずしも彼を魅するものでもない。彼は流行の説も新奇の説も、之を一様に見て、一様に彼が有する理由を以て、之を檢査反駁せんと力めて居る。彼は嘗て言つたことがある。「予は物を信ずるにも用心深い、信せぬにも用心深い」。彼が討論の嗜好も之より出たのであつて、彼は決して、何んでも單に議論其物を好み、何事でも疑ひ、敵手の理由が正當と知りながら、猶ほ自説に固

執する如き討論家ではなかつた。彼は敵手の理由が正當であると見れば、全く其説に従ふに躊躇せなかつた。彼が議論には個人的忿怨の如きは毫も雜らなかつた。何處までも厚意が現はれて居たとの事である。只だ一つ多少彼を憤慨せしめたことは、自己の確信より出でずしてドグマに固執することである。宗教的ドグマに對しても、科學的ドグマに對しても同様であつた。彼は深く確信して自ら基督教徒と稱して居たけれども、教會のドグマは毫も彼が信仰に與からずと自白して居た。吾人はフエヒネルが哲學を解するに、何時も此等の特質を記憶して居らなければならぬ。又たフエヒネルが有つて居た公平を有つて居なければならぬ。僻見を有して居ては到底フ

エヒネルの哲學を公平に評價することは出来ない。さてフエヒネルは彼が哲學的考察には、彼が自然科学に用ゐた方法の外決して他の手段方法を用ゐないと稱して居る。苟も經驗を基とし、之よりして世界觀を得んとする以上は、此方法に依るより外に方法がないと彼は言つて居る。而して此方法手段は即ち歸納と比論とである。歸納とは個々の事實より一般の法則を作り。比論とは吾人が知つて居る事物より、吾人が知らざる他の事物を判断する方法である。フエヒネル以爲らく、個々の科學のみならず、普通の世界觀も、かゝる歸納と比論とに依つて出來たものである。此普通の世界觀は科學社會に於ては傳來のものであつて、一層範圍の廣き教養ある社會に一般に

廣く流行して居るのである。フェヒネルは此世界觀を前に述べた通り「闇夜見」と稱して居る。その意は、色彩音響感覺感情の此世界を從て自然界の觀照及び同胞との交通に於て吾人に人生の幸福を與ふる萬事を、此世界觀は一時の主觀的經驗として居る、繰返し來る幻影と稱して居る。世界は其自身に不可貫の闇黒寂靜に鎮されたる混沌界として居る。世界には振動する分子、毫も休止する所なき單調の運動の外何物も無い、而して此混沌の中には只だ個々の光れる響ける點があるのみであり、暫時現はれて再び周圍の闇黒に没する感覺なるもののみがあると稱して居る。フェヒネル以爲らく、是れ自然科学者の世界觀であつて、神學も何等の抵抗なくして之に降り、敢

て一語の反駁を試むることもない。斯の如くんば神の麗はしき世界は地獄に變じ、人の慰藉たる赫たる來世の見込は不確實となる。否な、斯の如き闇黒の現世より如何に光明の來世が出來得べきか、解することが出來なからう。

フェヒネル以爲く、此闇夜見は極て不満足なものである。然れども是れ決して科學的知識の結果ではない。實は科學が其歸納と比論とを中途に止め、以て世界の不完全なる像を成立させたに由るのである。科學が建てた此不完全なる像は、宇宙一部の説明には好都合かも知れないけれども、此一部の説明を以て事物の全實在に適用すれば謬見となるのである。フェヒネルは此闇夜見の起る所を以て、重に該見が二問題を全然

解釋することが出来ないに歸して居る。此二問題とは、哲學上の最も幽奥な、最も困難な問題であつて、生命と意識との問題である。

二 生命の起原

先づ第一に生命は如何にして起るか。普通の説に依れば、或る未知の事情の下に、自然界の無機物から有機物が生れるといふのである。然らば生きた有機物は、死んだ生命なき自然の産物であるのである。是を以て有らゆる方法を用ゐて、無機物より有機物を作らんと試みて見た。然れども、無効であつた。是に

於てか説を爲して曰く、太古には地上に有機物を生ずる條件が存在し居たけれども、今は之が存在せない、また人工的に此條件を作ること出来ない。然し古に遡り考へ見ても、別に古代とて有機物の存在に今日より好都合の事情があつたやうに思はれぬ。生物が無生物より生ずるとは、畢竟確實なる根拠なきドグマである。

之に反して有機物は、その物質が新陳代謝し、其が頽敗して無機物が生ずるといふことは、吾人が常に經驗する事實である。而して學者之を顧ない。此經驗的事實よりして、却て普通の説の反對が眞理らしく思はる。即ち生物は無生物より生ずるにあらずして、却て無生物が生物より生ずるといふのが眞理

ではあるまいか。

二四二

無生物は生物より生ずるも、生物は無生物より生ぜずとせば、之が結論として自然に、此地球上の凡ての生物を嘗て産じた生物は、地球其物であるとせざるを得ない。地球は詩的譬喩的の意味でなくして、實際の意味に於て吾人が母であるのである。人は石ころから生れたと信ずる野蠻人がある。吾人は氣の毒そうに彼等を笑ふ。然れども生物が無生物から生ずると思つて居る吾人は、之に何の異なる所があらうか。吾人は、動物も植物も人も、地球上の全生物は、死んだ石ころの上に偶然降りた沈澱物であると見るではないか。吾人は幼時より學校に於て地球は球だと教へられ、山や川や海や生物が其上に畫かれ

てある球のやうに地球を心得るに至つた。フエヒネルは此考の愚なことを科學者の夢に譬へて明瞭ならしめて居る。その夢は、科學者清き水の岸に立つて居る。水中に正反對の兩端のみが雪白で全體が緑である球が浮んで居る。彼以爲らく、是れ何んであらう、恐くは非常に大きな滴蟲類であらう、捕へて以て此新しき種の記載を爲し、以て功名手柄にせんと。乃ち之を捉へて來て、檢微鏡下に置き、之を検ずる。縁飾縁毛のやうな物がある。然るに一層強度の鏡の下で見た處が、此滴蟲類と思つたものは、細胞が繋がつて居ないで、意外に其構成要素として、其表面に樹木、花、羊、馬、犬、人等が蠢動して居た。而して突然、そこに動いて居る一點は自分であるといふことが分つた。科學者

は豁然として悟つた。以爲らく、凡て他の植物や動物と同じく自分が其一部たる此球は生物に相違ない。彼は之を他の科學者に語つた。彼等は勿論彼を笑つた。然し何れが正しいであらうか。言はずして明かである。

然るに地球が活物であるといふことに就き、最も重大な反對は、地球は石ころより成つて、吾人が生命作用に必要な形態學的、化學的要素、即ち細胞、組織、機關、蛋白質等を有して居ないことである。然しながら地球は既に有機物を産じて居る以上は、他に有機的産出を示すの必要がないではないか。吾人が地球を有機的と名づくるのは、地球を構成する他の個々の生物を有機的といふより意味が少しく異ならなければなら

ぬ。吾人は地球を高等の個體と見なければならぬ。此高等の種類に屬する個體は、此地球と同等なる他の遊星である。

斯く見來れば、生物と無生物との差別は、構造上、或は物質上の差別でなくして、諸種の事物上に現はるゝ現象が生ずる運動作用の特性に之を求めなければならぬ。有機物も無機物も、皆な其運動は、二大原則に従ふものである。二大原則とは、一は因果の原理、他は目的の原理である。前者は廣く認められて居るけれども、後者は看過せられ、或は充分に了解されて居ない。因果の原理は、同一の事情の下には、常に同一の結果が生ずるといふのである。此原理は生物無生物、全自然界を支配し、しかも精神界をも支配するのである。然し此原理だけでは、個々の

現象の特質、從てまた無機有機の差別を定むることは出來ない。目的の原理は、因果律の如く、同じく自然現象の作用運動の一般の考察より生ずるものである。而して因果の原理は、事物に一定の法則があるといふことを明にしたものであるが、目的の原理は、其法則の方向を示すものである。故に因果目的の兩原理は、相矛盾するものでなくして、互に相補ふものである。

目的の原理は、フエヒネルまた「安定傾向の原理」 (Prinzip der Tendenz zur Stabilität) とも言つて居る。何でも他と區別の出來る相關的に獨立と見ることの出來る系統は、また其中の相關的に獨立した部分も一樣に、以前に自分が有つて居た状態に早晚還つて來る。例へば遊星は太陽の周圍に回轉し、常に同一

の状態に還つて來る。又た有機體に於ては、同一の生命作用が、一定時に同一の個體中に起り、或は子孫生殖の變化中に起る。但し此原理の有効は實際に於て絶對的でない、常に近似的である。例へば分子の一定の振動は、温度の變するに從て變する。遊星の運動も阻碍を受け、從て「安定」より遠ざかる。有機物の生命作用は、漸次に其平均の状態を失ひて「安定」より遠ざかり、最後に全く其平均を失つてしまふ。然し系統が大なればなるほど、周圍から制肘せらるゝことが少なく、從て同一の状態即ち安定に還ることが、絶對的の同一に接近することが多い。故に宇宙全體には、絶對的の意味に於て安定原理が有効でなければならぬ。

安定傾向を分ちて單純と複合との二種にすることが出来る。單純安定は、凡て無機分子例へば結晶體の分子の如きものに現はれる。複合安定は、凡て有機體及び之を構成する要素が好例を示して居る。即ち各細胞は其物質の新陳代謝に依つて安定の状態に止り、細胞の集結より成る全有機體も同様である。又た有機體の生殖の連續に於ても、死生の變化に依つて同一なる有機的形が常に新にせられ、以て安定の状態を維持するのである。

然らば宇宙の諸系統は、此二種の安定の何れに屬するものであるか。吾人の地球は太陽の周圍を回轉し、同一の状態に還るを以て、無機體の完全なる安定に比すべきものである。然れ

ども、其作用の複雑なる點に於ては、一定期に出沒する生物に類似して居る。丁度吾人の身體が、他と差別ある一系統であり、中に諸の力や目的があつて之を支配して居るやうに、地球も獨立したる他の地球に相對し、其中に力や目的を有して居る一系統である。地上の作用も身體の作用の如く、或は長く或は短く、時間的に一定期に、空間的に一定距離に規則正しく分割されて居る。宇宙的系統は、此分割此還元安定が規則正しく行はれて居るからして、有機的作用の最も完全なるものと見ることが出来る。此完全なることは、宇宙系統には、其一定時に起る作用が錯綜して居ると同時に、吾人が地球の無機體に現はれるやうな殆んど完全なる安定があるからである。此安定の

完全が、宇宙的系統の有機的生活と個々の有機體及び其構成要素の生活と別る、以所である。フエヒネルは宇宙的系統の生活を宇宙有機的生活と名づけ、各有機的生活を分子有機的生活と名づけて居る。

さて地球上の生物が地球其物より生ずると同じ理法で、分子有機的作用は宇宙有機的作用より發することゝ見なければならぬ。而して一般に安定現象は、安定のより少なきものより、安定のより多きものに移り、從て有機物は無機物に移るといふのが其傾向であるからして、分子有機的作用が宇宙有機的作用より成立すると同時に、無機物質も之より成立つたと見なければならぬ。地球は單に萬物を載するが故のみにあ

らずして、本當の意味にて萬物の母であるのである。然し地球は、吾人が太陽系なる大なる宇宙有機的系統より見れば、一個體に過ぎぬのである。太陽系なる大なる有機體は、凡を統一する宇宙全體より見れば、また一の個體に過ぎぬのである。

三 意識の成立

意識の起原に就ても普通の説は、生命の起原に就ての如く誤つて居る。俗見は則ち意識を以て無意識より起るとなし、而して未だ之が證明を與へない。此見解の誤謬缺陷は、卑近なる外見上の比論に依つて説を立てるからである。世人動物に精神意識があると思つて居るのは、動物が吾人々類と類似の神

經系統を有して居るからである。然し如何にして神經系統が意識を有するに至つたかは知らない、また神經系統のみが意識を有して、何せ他の物質の結合が之を有せぬかを審にせない。動物が感覺を有するには神經が必要であるから、植物も感覺を有するには神經を有して居らなければならぬといふのは、丁度ワイオリンは音を出すに絃を要するから、笛も音を出すには絃が必要であるといふのと同様である。是れ意識が生ずる真正の條件を究めずして、全く種類の異なつたものに對して有効なる條件を、他の種類に持出して證明せんとするのである。植物に感覺ありとせば、是れ神經に依つて出來たのでない。誰も神經がなければ一般に如何なる感覺もないと證明し

た人はない。原生動物には、神經がないけれども、機能があるからして、感覺があると思はれて居るではないか。勿論植物の機能は、多くの點に於て、最單純なる動物のそれとは種類を異にして居る。然し感覺は單に動物的機能に依つて現はるゝとは、誰も斷言することは出來ない。且つ地球、遊星等も、之に意識あるには、腦髓や神經を有せぬければならぬといふのは、部分より全體を推する不正の推論法である。地球に屬して居る人間動物が腦を有して居る以上は、地球は既に要求せられた一種の意識の機關の多を有して居るのである。地球は全體として凡ての人類動物を包含して居るから、此等の動物の機關、或は之に比すべき意識の基體が、再び此全體に繰返されぬと見る

が當然であらう。

意識の起原に關する俗説は、かく不都合なる外的の比論に依るのであるが、意識現象の變化の原因に付ても同様である。吾人が表象普通の言葉で言へば念想想といふべきものは忽ちにして來り忽ちにして去る。而して一定時に於ては吾人が意識の内容は極めて狭き者である。即ち其内容は或は既に久しき過去の知覺の回想より成るかと思へば或は直に少し前にあつた直接印象——此印象は其時注意を向けなかつたから暫時無意識であるが、やがて意識に現はるゝ印象の回想より成ることもある。然らば嘗て意識に在つて後ち意識より消失したものが、モ一度意識に現はるゝ(表象)は何處より來るであらうか。又た意識より

消失するものは何處に行くであらうか。フェヒネルは之に答を與へて曰く、個々の生活が包含的の大なる生活作用の分枝である如く、個々の意識は、それが個人に於ける最初の成立であらうが、或は其中の個々の表象の成立であらうが論なく、何れも一層大なる意識に基き、此大意識の中に小意識各表象は沈み、又た其よりして現はるゝのである。地球上に於ける個々の意識の基ける大意識は、地球の全生活と關係ある者としか思へない。吾人が意識の最初の成立は、睡眠からの覺醒に類して居る。人は其生るゝ際に、曖昧なる回想と見るべき多くの精神的能力の蓄を世界に持て來るのである。睡眠から覺醒する時には或る意味に於ては個々の意識の成立が繰返さるゝと

言ても宜い。同様に表象の來去從て注意の變化も、睡眠覺醒の變化が再び個々の意識に現はれる作用である。

凡て此等の内部的經驗は、譬へば意識の闕といふべきものに從て排列する。此闕の上に吾人が覺醒時の總意識がある。丁度波に譬ふれば總意識は大波である。此大波の上に變化する小波がある。此小波が即ち意識の特別の内容たる個々の感覺表象である。此意識が上に現はるゝに越ゆる闕を主闕と名づけ、總意識の上に現はるゝ個々の感覺表象が越ゆるのを上闕と名づくる。さて主闕も上闕も共に意識と無意識との境界を表はすのでなくして、より包含的の意識と、より制限的なる意識、即ち大小意識の境界を表はすのである。意識は皆闕を有して

居る。吾人の意識は勿論、一層大なる包含的の意識も闕を有するであらうから、個人の意識の成立は、大意識が闕の上に現はれた作用と見るべきである。地球の意識は、凡て地球上に生活するものの意識の統一を包含すること、丁度吾人が意識が時々刻々に出沒する經驗念想を包含する如くである。又た地球の總意識は、地球自身及び其上の動物の歴史を包含する記憶全體を支配すること、丁度吾人が意識が、個人生活の全體を回顧し得る如くである。然し地球自身は、太陽系の宇宙有機的の一個體であり、而して又た太陽系其物も宇宙に對しては一個體であるからして、地球自身は段々と登り行く意識の層の中の一個體である。此意識の層の最頂上は、凡を包含する宇宙の

總意識即ち神的意識である。

此神的意識は最下層より最上層に至るまでの凡ての意識を自己の經驗として包含して居る。此神的意識にも闕の原理が應用せられて居ると見るべきである。闕の下にある劣等の意識は發展再生して、闕上の高等の意識となるからして、後者は前者の有する凡を包含して居るのである。かくてフェヒネルは進化の思想を神的意識にも適用せんとして居る。此進化は如何にして居るかといふに、神的意識は最初よりして因果目的の宇宙的大原則に従へる宇宙の計畫を有して居る。此計畫の外的實行は宇宙の出來事の進行である。神は自分の作物の目論見を以て居る藝術家の如きものである。此意味に於て

神的意識は人間の意識の如く發展進化するものである。只だ神に於ては最初より統一的に計畫が充満し、法則に従ふ丈である。故に神は、丁度一個の人間が其自身生涯の運命の産物である如く、神自身の自己經驗の産物である。而して其自己經驗は同時に宇宙の經驗である。此思想に従へば人間も神の事業の共同者遂行者と見ることが出来る。且つ世界の禍殃罪惡は神の根本的性質の與らざる所ではあるが、造化の完全善や美の創造に必要な宇宙秩序の一要素と見ることが得るのである。故に宗教的のフェヒネルは大に此思想を喜んで居たやうである。

四 不死説

生活と意識とは決して成立したものでなくして、最初より存在する宇宙の根本的活動である。而して兩者は實際に於て同一出來事の異なりたる發表方面である。譬へば圓は、之をその中心より見ると、圓外の一か所より見ると、相異なるやうであるけれども、同一の圓である。丁度生活の作用も、意識の作用も、同一の物體精神的出來事である。外部より見れば分れて萬物となり、内部より見れば結んで意識の統一となる。兩者互に相補充する。然し共に全實在を包含するのである。世界は物體精神的存在である。従て精神は腦の一點に座を有する、廣がつてな

い特別の存在ではない。又た凡ての動物は精神を有して居る。尤も精神生活は凡ての機關の共同作用に依るのである。而して個々の意識現象が直接に關係ある運動を、フエヒネルは精神物理的運動と名つけて居る。生活や意識が根原的である如く、精神物理的運動も根原的であつて決して成立したものでない。宇宙有機的作用は皆な精神物理的運動である。宇宙有機的作用が分子有機的に分化して、個々の精神物理的運動が生じ、此運動は各個の意識の基礎たるのである。凡て個々の意識の作用は、それ／＼特別の精神物理運動に結合して居る。表象が記憶象として新に現はれ出つるのは、通俗に言へば過去の事を想出すといふことは、是が個々の意識の闕の下に、其が屬

して居る總意識の中に、實際の表象として存在するからである。丁度之と同様に表象に伴ふ運動も繰返し現はるゝことが出来る。是れその運動が一度成立せば決して滅すること無く、只だ一時推しのけらるゝばかりであるのである。精神物理的運動が此の如く無窮に續くのは譬へて言へば、水の表面に波があつて、此波が他の波と會せば、見たところでは消失してしまふけれども、實際に於て其運動は繼續するのと同理である。此波の譬よりして疑問が起る。精神物理的運動は、異なつたものに變じてしまつて、同一のものが現はれないではなからうか。従て他の疑問が起る。生活が終ると、吾人が意識の繼續はどうなるであらうか。

フエヒネルは精神物理的運動の考察からは、此疑問を解くことが出来ぬと自白して居る。該運動は不明であつて、物理的分析を施し、以て其の行衛を辿ることは出来ぬ。然し該運動の精神的の方面を観察することが出来る。是よりして精神的方面に對する物理的の方面も觀察することが出来る。人の身體は物質の新陳代謝によりて絶えず新にせられて居り、遂には前の物質の一分子も残らぬといふに至つても、精神は依然として繼續し、老人が幼少のことを回顧することが出来る。是れ一度成立した精神物理的運動は、絶えず新になりつゝある肉體の要素に移るからである。人間の意識が人の長き全生涯を越えて廣がり、其活動の永久に繼續することの否定すべからざ

る以所は、則ち是に在るのである。

斯の如く吾人が精神的経験及び精神物理的^{スピリチュアル}基體の繼續は、一定の固定した物體に結合されて居らぬ。同様にまた此繼續は、吾人が身體にのみ結合されると見るべき理由もない。死體は感覺表象の成立に不都合であつて、精神物理的運動が出来ない。然れば該運動は如何にかして、吾人が周圍の世界に繼續せざるの理があらうか。意識の闕の理を考うれば、之が可能を許さねばならぬ。闕以上の吾人個々の意識は、精神物理的運動を有する體が亡ぶれば、闕以下の包含的意識に入ると見なければならぬ。

さて個人の精神の経験は、此経験が精神内に永續せざれば

意識では無い。経験が留り保存されるればこそ意識があるのである。而して此経験の中最も重大なるものは個人性の意識である。此重要なる個人性の意識即ち自己意識が、包含的の大意識の中に没滅してしまふとは、フェヒネルより見れば、考へ得べからざることである。相當に發達した個々の意識は、皆な此大意識の経験の一部であるのである。フェヒネルは吾人の意識は、此大意識と結合して、精神が窮屈なる肉體と結合して生ずる制限を脱却するものと考へて居る。未來生活は、彼に於ては、實に此地上に於ける生活である。人間は三度此世界に生る。第一世は母の胎内に在る睡眠の不完全なる生活である。第二世は睡眠と覺醒と相半ばせる、より高尚なる生活である。第三

世は同じく地上に在る永久に覺醒したる一層高尚の生活である。此第三の生活は、天の彼方あなたにあるのでもなく、此方こなたの地下にあるのでもなくして、地球上吾人の間に在るのである。死者は吾人の中に生存して居るのである。吾人は吾人が肉體に制限せられて居るからして、只だ思想記憶に於て死者と交通して居る。然し死者は明亮の意識を以て吾人が周圍、吾人が中に生活して居る。吾人が思想の多くは、彼等か吾人の精神生活に直接に干與するに依りて起るのである。而して吾人は吾人が未來の生活の條件を自ら此世にて作成しつゝあるのである。猶ほ其他詳細は「死後の生活」に述べてある通りである。

然れば現世も來世も、唯一の永久に存在する生活に歸する

のであつて、其生活の場は此地球上である。吾人は地球なる大意識の生活に與り、而して地球は吾人の爲めには、凡てを包含する神的存在に對して媒介の地位に立つて居る。地球は光り、鳴り、見、聽くことの出来る高尚なる活物意識である。此見解が即ち彼の所謂「白晝見」であつて、光る鳴る自然を以て只だ一時的の幻影と見る科學の「闇夜見」に對して居る。フエヒネルは此白日見が科學の教ゆる結果と一致するのみならず、吾人が經驗知識の全體と違ふことなくして、來世の謎を解き得たりと信じて居る。勿論闇夜見の證明すること能はざる如くに、白日見も證明することは困難であるけれども、知識の此缺陷を補はんが爲め、一度信仰の助力を乞はゞ、白日見はより多く慰藉

を與ふる信仰たること疑を容れぬ。他人はいざ知らず、彼自身は此世界觀の確乎たる信仰が、彼に福祉の情を満たし、しかも彼が経過した有らゆる困難に際しても、彼をして、最も幸福なる人なるの感を抱かしめた。彼は彼が大病に就て言て居る、「予が生涯の最も暗黒なる最も希望少き時が、死後の生活中の思想に於ける白日見の曙光より以前であつたならば、予はかの時期を耐ふることが出来なかつたであらう。」

五 結 論

以上フエヒネルが死後の生活説と關係ある彼が哲學の大略である。以て彼が「死後の生活」の思想が孤立した架空の説で

なくして、彼が哲學の大系統の一部分否な重要な一部分寧ろ結果であるといふと分らう。又「死後の生活」の考が充分に且つ深く解せらるゝであらう。然し以上の説明は同時に彼が哲學の綱要、其根本思想を叙したものであつて、之を以て大略彼が哲學を窺ふことが出来やうと思ふ。猶ほ彼が哲學の傾向性質に關して少しく附記して置かう。彼が思想の了解評價に裨益する所があらうと思ふ。

ナンナ及びツェンドアフスタ等フエヒネルが哲學上の著述が現はれた時、世間は之に對して冷淡であり、且つ彼が説を解するものゝ少なかつたことは、前に彼が傳記の所に述べた通りである。世或はフエヒネルを以て空想家と爲した。フエヒ

ネルは此空想家なる名を甚だしく嫌つて居た。彼は以爲らく、天上或は地上に於ける現象界の確實なる法則に反する事柄、經驗全體に毫も基礎理由を發見する能はざる事柄を以て實際とする人こそ眞に空想家である。例へば輪廻の説の如き、或は人の靈魂は太陽或は他の遊星或は他の遠隔の世界に、死後引續き生活するといふが如きは空想である。又た現世と來世との間に何等の媒介關係を認めざる普通行はれて居る宗教的世界觀も空想的である。然し予が説に於ては、其中確たる事實に矛盾する一點でもあるか。誰人も之を發見することが出來ぬであらう。却て予が説く所は、實際の自然、實際の生活の觀察より來たのである。かくフェヒネルは空想の名を忌んで

居る。彼の哲學は固より想像に充満^みて居るけれども、事實を顧みない、事實を勝手に左右する想像が、其力を逞うして居るのではない。彼が説く所は何れもあり得べきもの、考へられ得べきものばかりである。然し此以上の事は爲ない。フェヒネルは以爲らく、一般に信仰なるものは、知識と全く別物ではない、信仰は、知識の中に立入り、知識の構成要素を結合し之を完成するに缺くべからざるものである。例へば他人も自分の持つて居る如き意識を有して居ると假定すること、或は宇宙の非常な遠方に於ても、非常なる未來時に於ても、因果律は吾人が周圍の世界に於けるが如く有効であらうと假定する等は、知識には缺くべからざる假定ではあるが、矢張信仰の一事に過ぎな

い。又た物質や勢力に關する假定、自然界や精神界を支配する一般の法則の假定等も、矢張一種の信仰個條である。是等は寧ろ人が之に慣れて居て確實であると思つて居るのである。然しフエヒネルは他方に於て純粹の知識と純粹の信仰とを嚴密に區別し、信仰の内容が、單に傳來であるからとて、或は廣く行はれて居るからとて、直に之を以て眞即ち知識としてはならぬとして居る。信仰は知識を完成するに必要缺くべからざるものであるけれども、此完成の行り方如何が、信仰の正否如何の標準となるとして居る。此標準より見て、科學者の唱へる世界觀の信仰は正當でなくして、之と正反對に立てる彼自身の世界觀が充分に正當なる信仰であると確信して居た。この

俗見と反對の自覺、自説が人に福祉を與ふるものなりとの確信が、實にフエヒネルが哲學の興味ある所である。彼の見に従へば、哲學は知識の事に非ずして信仰の事である。世界觀は數學の定理の如く證明することも出来なければ、自然科學の原則の如く實驗的に證明することも出来ない。フエヒネルより見れば、哲學は宗教と姉妹である。同時に哲學は宗教と科學との中間に立ち、一方には科學の結果と一致戻らざる世界觀を立て、他方には宗教心に満足を與へ、以て兩者の融和を計るものである。故にフエヒネルは、理論を以て人を説服するのみならず、預言者的精神を以て人類の謬見を除き、之をして彼に啓示された神や世界の知識より生ずる幸福を頌たしめんとす

るのである。

二七四

最後に、フエヒネルが精神物理学は今日の實驗心理學の基礎を與へ、又た彼が美學は亦た今日の心理的美學の基礎を据けたものであつて、共に學術界に於ける彼が大功績であること、既に彼が傳記の中に述べた通りである。故に此兩者の大略を述べたく思うけれども、此附録の目的が彼が死後の生活説の充分の了解であつて、此目的は上述彼が哲學の略述にて達せらるゝであらうと思ふから、之は略することゝする。只だ予は彼が精神物理学に關して一言附加して置かう、是れ精神物理学は、フエヒネルより見れば、彼が哲學の附屬であつたからである。

精神物理学は前に述べた如く、精神の現象を物理的に測定せんとする彼が創始した新科學であつて、實に今日の精神的實驗科學の基礎を爲したものである。従て其方法何處までも嚴密科學の方法である。之を神祕的接神的詩的の彼が哲學を網羅せるツェンドアフェスタに比すれば、實に一見雲泥の差がある。前者は實に第一流の嚴密科學の精神の人が、老熟なる自然科學者及び熟達せる數學者が有する周密を以て、新しき學術界を秩序的に開拓したものであるとしか思へない。之をツェンドアフェスタの詩的夢想的なるが如くに比すれば、到底同一の人が兩者を作つたものとは思はれない。又た兩者に如何様なる交渉關係があるとも思へない。然るにツェンドア

フェスタの全體を読み、精神物理学の末章を読んだものは、此
 両者が其根本、其目的に於て同一であるを見て、驚嘆を禁ずる
 こと能はぬであらう。精神物理学は、ツェンドアフエスタの世
 界觀を、該觀が假定した物心兩界の關係よりして、嚴密に科學
 的に立し、以て、せめては經驗の範圍内に於てだに、信仰を化し
 て知識となさんとした廣大深遠の企圖に外ならぬのである。
 精神物理学は只だ此企圖に止らず、此學が究めんとする身體
 と精神との關係は、神と宇宙との大なる關係に歸入するもの
 であるから、從て此兩關係の説に就ては、精神物理学の説は、正
 にツェンドアフエスタの世界觀に一致して居る。吾人此兩者
 を熟讀すればするほど、兩者が其根本に於て同一内容を有す

ることが明瞭となつて來る。只だ其内容の各部分が、色々異つて
 排列せられ論せられてあるばかりである。實にツェンドアフ
 エスタの有らゆる重要な思想は、精神物理学に再現して居
 る。而して又た反對に精神物理学の根本思想は、ツェンドアフ
 エスタに發見することが出来る。ザント、フェヒネル講
 演四十三及び四頁參照

大正十二年十二月廿五日印刷
大正十三年一月一日發行

(定價金一圓八十錢)



譯者	平田元吉
發行者	高島米峰
印刷者	藤澤淨圓
印刷所	同朋舍

東京市小石川區原町六番地

東京市上京區間之町二條上ル

東京市小石川區原町六番地

京都市上京區間之町二條上ル

京都市上京區丸太町川端東入上ル

發行所

東京市小石川區原町六番地
振替口座長野三二九四番
電話小石川一二八番

丙午出版社

K-17-6

東洋大學教授 加藤咄堂先生著

死生問題

菊判 七百四十四頁
定價 料四圓

此の書まづ死生問題の意義に筆を起して西洋に發達したる死生觀を檢討し古代より近世に至る迄凡そその代表的の意見一として擧げざるなく轉じて佛教以前の印度諸哲學派の死生觀を詳述し進みて原始佛教の所説を盡くして支那に移り儒家道家の死生觀より更に支那佛教の所説を紹介し遂に日本に來りて上古より王朝源平時代を経て徳川時代に至れる神儒佛の三道及び文學に現はれたる死生觀を研究し死生問題の歸結を説いて筆を結ぶ

高島米峰先生著

來世の有無

名家 筆跡 拾入
定價 料八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するか滅しないのか元來吾等に靈魂などといふものがあるのか無いのか凡そ此くの如き難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

終

